

平成30年1月21日(日)

老球の細道386号

スポーツ活動における先輩、後輩

会津バスケットボール協会 室井 富仁

昨年末、大学時代に1学年先輩だった年代のバスケットボール部OB会が会津若松で開催された。私の居住地であることから誘いの声がかかり参加した。卒業以来会う先輩もいて40年ぶりの再会となり、昔話と近況報告で多いに盛り上がった。

話の中で、私が大学時代いかに生意気であったかという話題になった。先輩を先輩とも思わないでマイペースで学生時代を送っていたということであった。ある先輩が1年生の私に対して「ボールを磨け」(当時ボール磨きは1年生の仕事)と注意をしたら、私はそれに対して「俺は大学にボール磨きに来たのではない」と反発したという。何事も言った方は忘れ、言われた方は一生忘れない。相撲界にいたらマイクで殴られていただろう。

昨年末大相撲界では日馬富士が後輩力士の生意気な態度を注意するために暴行をする事件が起こった。そのために日馬富士自身が引退するだけに止まらず、大相撲界の組織まで揺るがす大事件に発展してしまった。まだその悪夢も冷めないうちに、今度は水泳界で先輩が後輩を殴って指導した同じような事件が発覚した。昨年12月の日本代表合宿でのことである。炊飯当番の時間を巡って先輩選手が後輩選手を腹とあごを一発殴ったという。

日本の学生スポーツ界では昔から先輩、後輩の関係には絶対的なしきたりがあった。4年生神様、3年生天皇、2年生平民、1年生奴隷などと称して、たかが1年学年が上だからと言って理不尽な上下関係を強いていた。私は運よく高校、大学とそのような雰囲気ของทีมに所属することがなかったので、民主的にバスケットボールができた。ただ自己中だったので、上達するためには先輩を先輩とも思わないような態度をとったことがある。そのために先輩方と対立したこともあったが、暴力を振るわれたことは一度もなかった。

私は尊敬できる先輩の言うことにしか耳を貸さなかった。昔から先輩風を吹かしながら、自分自身は大したこともしていないのに後輩にあれこれ注意する人がいた。そういう人はほとんど相手にしなかった。だから、後輩にはよっぽどのことがないかぎり、偉そうに注意したり、暴力をふるったりしないようにした(?)。

中学校や高校の部活動などでは、顧問の指導が入らないような環境下で活動がなされると、実力や努力の伴わない上級生が理不尽な権力を振るい、理不尽な上下関係が形成される危険性がある。下級生が先輩の下働きや、召使のような状態になり、陰険ないじめが横行するケースがあるので注意をしなければならない。

スポーツ活動は平等で民主的で実力がものをいう世界である。コートの中では先輩も後輩もない。また、チーム内の雑用も上級生だから何もなくてよいなどということもあってはならない。かつて京都大学アメリカンフットボール部が日本一に君臨していた頃、このチームでは部内の雑用は上級生が率先してやるというルールがあった。下級生は体力もなく、学生生活にも慣れていないので、練習に参加するだけで精一杯だから、余計な負担をかけないという実に合理的な理由からであった。

スポーツのみならず優れた組織は最も実力のある人たちが最も過酷な仕事をする。そして最も努力をする。それが先輩、トップの品格である。そのような組織ではその人たちの背中を見て後輩たちが学ぶ。説教や暴力、ビール瓶やカラオケマイクなどは無用である。